

会員のば

映画鑑賞のすすめ

札幌市医師会
JA北海道厚生連札幌厚生病院

吉田 博希

北海道医師会から原稿の依頼をお受けしました。ドラマ「Doctor-X」の大門未知子先生ではありませんが、趣味、特技は手術？というような状況でしたので、あまり皆さんに披露するような趣味というものがなく、何を書いたら良いのか悩んでしまいましたが、最近、映画館に行くことがあったので、最近の映画事情について述べてみます。

皆さん、最近、映画館に足を運んだことがありますか？ 20～30年前の昔の映画館は入れ換え制ではなく、通して上映しており、指定席もないため、上映中にスクリーンに入場し、空いている席を探すか、目星を付けておいて、席が空いた途端にその席に座るといようなひどい状況でした。小さな子どもを連れて「ドラえもん」を見に行った暁にはひどい混雑で、目星を付けていた席が上映終了後も空かず、何回見る気だーと、違う席を探すも時すでに遅しで、空いている席を見つけることもできず、階段に敷いたダンボールの上に座り、子どもを抱きかかえながら映画を見るという、今では考えられないようなこともありました。

現在はほとんどの映画館が完全入れ換え制となり、席も指定席となり、そのようなことはなくなりました。また、映画館の座席も前席との間隔が広くなり、膝がぶつかることもなくなり、高低差も高くなり、前の座席の人の頭が邪魔にならなくなりました。自分は座高が高かったため、後ろの人の迷惑にならないようにと、できるだけ小さく縮こまり、頭も動かさないようにして見ていたため、首が痛くなってしまいましたが、今では快適に鑑賞することができます。また、IMAX[®]シアターという素晴らしい劇場も誕生しました。IMAX[®]とはカナダのIMAX社が開発した映写システムのことで、通常の映画で使われるフィルムよりも大きなサイズで映像を記録、上映することができます。床から天井、左右いっぱい広がる超大型スクリーンが通常よりも観客に近い場所に設置され、観客の視野はほぼすべて映像と

なり、これまでにない美しさと臨場感を体感することができます。さらに高度なチューニングシステムにより精密なサウンド調節が行われるため、針の落ちる小さな音からジェット機が飛び立つ大きな音まで、劇場全体がクリアなサウンドに包まれ、音響にも優れています。これは家庭のテレビでは味わえない映画館ならではの醍醐味です。

また、最近の映画はコンピュータグラフィックス(CG)が駆使されるようになりました。12月に封切りになった邦画「海賊とよばれた男」は「ALWAYS 三丁目の夕日」「永遠の0」のヒット作で知られる山崎貴監督の作品です。CGを駆使したVFX(視覚効果)を操る日本の第一人者です。映像は実写にミニチュア、それにCGを組み合わせられていきます。ミニチュアも昔の「ウルトラマン」の頃と比べるとはるかに精巧になりました。今回の映画でも建物の1階部分はミニチュアで古い町並みを再現し、2階部分はCGで合成して作ったようですが、ぱっと見には全く分かりません。CG、VFXというと「スターウォーズ」などの未来の空想世界を描くことを想像してしまいがちですが、実際にあった過去も描くことができます。ただ、VFX技術はあくまでも主役ではなく、映画を彩る脇役で、これにより人の心の奥まで揺さぶる力を発揮できるのだそうです。

この1週間後にはVFXクリエイターとして数々の賞を受賞した映画「GODZILLAゴジラ」を監督したギャレス・エドワーズが監督を務めたルーカスフィルム制作の「ローグ・ワン/スター・ウォーズ・ストーリー」が封切りになりました。言わずと知れた「スター・ウォーズ」シリーズのスピンオフ映画です。ルーカスフィルムはCG、デジタル技術を先頭になって発展させてきた「スター・ウォーズ」シリーズ、「インディ・ジョーンズ」シリーズのジョージ・ルーカスが設立した映像制作会社です。演じるのは俳優さんですが、その俳優さんたちの演技を何倍にも素晴らしい映像に仕上げるのはVFX技術です。この映画でもVFX技術が駆使されており、IMAX[®]で上映されています。というようなことで、最近映画に少々はまっています。どうでしょう、皆さんも映画館に一度、足を運んでみてはいかがでしょうか。

昼からビール

札幌市医師会
恵佑会札幌病院

渡邊 昭仁

夜の宴会で飲むビールもおいしいですが、昼から飲むビールは格別においしいものです。とはいっても、私はアルコール中毒ではないですが。たまに行く海外で時間のあるときには、昼からビールを飲むことがあります。一昨年訪れたチェコは、ビール消費量が世界一（え？ ドイツじゃないの）とのことで、昼飯を頂く前に、ピルスナー・ウルケルを一杯グビリ。これがなんともおいしい。聞いたところによると、ピルスナーが世界で初めて安定的に飲めるようになった第1号のピルスナービールのようにです。先人達の努力の結晶だったんですね。おいしいはずですが。きつと初めてこんなに透きとおったきれいなビールを見たときは感動したんだろうな、と勝手に想像しながら飲むビールは、さらにおいしく感じちゃいました（実際、日本のビールよりもおいしいように思ったのは開放感というツマミがあったからかな）。東欧は音楽だけでなく“ビールも芸術だ”と昼から酔っ払いました。参考までに、チェコでは水よりもビールの方が安いようです（私が訪れたときには）。ビール消費量が世界一も納得です。

また、アメリカ西海岸のシアトルでは、いろいろな小さなビール醸造所があり、その作っているところでもビールが飲めます（というかビールしか飲めないような感じのところもあります）。ビールの種類が何種類もあり、おすすを聞くと「“IPA：アイ・ピー・エー”がいいよ」と言われ、“IPA”をたくさん飲んできました。“IPA”とはIndia Pale Aleの略で、中身はPale Aleの強化版のようです。Pale Aleよりもアルコール度数がすこし高く、苦味を感じる独特な味でした。観光客用に(?)飲み比べのセットというものもあり、6種類くらいのもので飲み比べるのですが、やはり“IPA”が一番おいしく感じちゃいました。シアトルの街でお昼に飲む“IPA”も、心に残るおいしいビールでした。

そうはいつでも、夜は夜で食事をしながらビール、ワインなどを欠かすことはありません。しかし昼から飲むビール、特に太陽光の下で飲むビールはやはり場所を問わず、種類を問わずおいしいです。昼に仕事をしている人に隠れながら飲むビールには魔性が潜んでいるようです。将来にアルコール中毒にならないことを祈りながら、今後も昼からビールを飲む機会（場所かな）を楽しみにしています。

雨を見たかい—CCR

札幌市医師会
小笠原クリニック札幌病院

真尾 秀幸

ある朝、車を運転しながら、天気が気になりラジオを流しました。確かNHK第一放送だったと思います。最初に流れてきた曲はギルバート・オサリヴァンの“Alone Again”。話題はどうも1970年代の海外ポップスのようでした。

次に流れたのがクリーデンス・クリアウォーター・リヴァイヴァル(Creedence Clearwater Revival, CCR)の『雨を見たかい』(原題“Have You Ever Seen the Rain?”)。コメンテーターの方が言うには、この曲の“雨”の意味は、作者のジョン・フォガティーは否定しているものの、ヴェトナム戦争で米軍機から次々に投下されるナパーム弾のことであると言っていました。車を運転しながら英語に疎い私は「なるほど…」と思いました。

そう解釈すると、姉妹曲の“Who'll Stop the Rain”も、「一体誰がこの無意味な戦争を止めてくれるんだ」というメッセージとなり、辻褄が合うわけです。私は、また「う～ん」とうなずくのでした。

去年の秋はボブ・ディラン(Bob Dylan)のノーベル文学賞受賞が話題になりました。ディランは授賞式を欠席しましたが、代理で出席のパティ・スミスがディランの代表作“A Hard Rain's A-Gonna Fall”(邦題『激しい雨が降る』)を授賞式で歌ったそうです。この曲の“雨”も、核ミサイル攻撃の意味であるとの解釈があります。ディランは否定しましたが、歌が作られたのは米ソによる全面核戦争への展開も懸念された1962年、キューバ危機のときでした。

ちょうどその頃、アメリカ次期大統領選が終わり、共和党のドナルド・トランプが指名されました。この拙文が掲載される頃には、トランプが第45代アメリカ合衆国大統領に就任しているはずですが。これからいったいアメリカはどこに向かうのでしょうか？そして世界はどう変わるのでしょうか？

『雨を見たかい』 久々に聴いてみようか。

三つもの

札幌市医師会
日之出内科クリニック

辻永 宏文

三つ数えろ。しかし、数の概念として古代には、ひとつ、ふたつ、それ以上はたくさんという考え方があったそうだ。天体運動の三体問題は、星の参加者が三名になると途端にカオス化して計算が困難になることを示している。子どものころから、読み書きはまあまあとしても算数と図画が苦手だった。三角関数だけはサイン・コサイン・タンジェントの語感に魅せられて「魔法の三つ、サイン・コサイン・タンジェント」と舌頭三転させながら、最適解を求めた気がする。図画の時間のデッサンはからっきしだった。「へのへのもへじ」か「いろはにほへと」でも練習した方がましと思った。じつのところ、書道だってへぼだった。今でも朱を入れられて冷汗三斗の夢を見る。美術教師から「諸君のうちに医学部を目指すものがあるのなら、絵心がないものにならないよ。ロダンのデッサンを参考にするとよろし」と訓示を受け（実際医者になるのにデザインや素描の力が大切なことは後年、嫌というほど思い知らされる）、美術教室にあった「考える人」のデッサンをするにあたり、せめて鉛筆の芯だけはこだわることにして、三菱ユニ鉛筆の硬軟三種のうちHBかBか2Bのいずれかにするか迷いあぐねた（2B OR NOT 2B）記憶がある。

三つものが好きで、言葉や文脈、話題、モノに関しては手当たり次第に三つのタグをくっつけては覚えるようにしている。三徴（ウィルヒョウ・ベック・シャルコー）、三品（名品・神品・逸品）、三すくみ（蛇・なめくじ・蛙）、三舟の才（漢詩文・和歌・管弦）、トリプルA（3A、腹部大動脈瘤・アメリカ自動車協会・断酒会）、トリプルB（3B、バッハ・ベートーベン・ブラームス、まてよ血液脳関門から入るべきか）、ならば3C、3D、3Eは如何と順にあげていくのは恰好の暇つぶし（ただし3Xまでいくと品が下がり、3Zで眠くなる）、世阿弥（花と面白きとめづらしきとこれ三つは同じ心なり）、徒然草（三人のよき友、物くるる友・医師・知恵ある友）、三重戒（好色・博打・大酒）、三手の読み（次の一手をこう指す・そう来る・応手を考える）、三女神・三人の魔女・三婆（具体名はあえて割愛、諒とされたし）、テニスコート面の解剖学三題嚙（肺胞表面積だと一面分・小腸吸収粘膜は二面分・血管内腔面積は六面分に相当）、馬上・枕上・廁上、他にも網羅・羅列・列挙していったらきりが無い。

ロダン「考える人」の三つものだと何を連想するか。

其の一、便秘解消法。洋式トイレに比べて、和式で蹲踞の姿勢を取る方が、直腸恥骨筋の角度が開いて具合がよいらしい。大便の秘結せる洋式トイレ愛好者は、足台を置いて「考える人」のポーズをとると、便塊も通過しやすくなる。米国大腸肛門学会で足台を売っていたそう。

其の二、グレン・グールドの演奏姿勢。夏もマフラーとコートと手袋を肌身離さず、後年スタジオにこもっては自演のテープを切り継ぎして彫心鏤骨というにふさわしいレコードを作り上げたピアニスト。子どものころに父親が器用に造作した高さ30センチもいかない小ぶりの椅子しか使わず、いつも両ひじはピアノの鍵盤よりはるか下。漱石『草枕』を再読三読したという。彼が便秘に悩んだかどうかはわからない。

其の三、NHK教育テレビの始業と終業に出演。「考える人」が教育上良いか否か、教養番組にふさわしいか否かわからない。あの彫像は沈黙思考するロダン自身を模したとか、「神曲」のダンテであるとか、地獄の門を覗き込む番人という説などあり、教育チャンネルになぜ選ばれていたのか廁上で思案投げ首するのの一興。

『三つ数えろ』ボガードの映画にはこのセリフが二回出てくるがチャンドラーの原作にはないらしい。某月某日、三つものネタが無いか知人と閑談したおりに、「動詞的三つもの人生というのはどうか、フィリップマーロウの吐くセリフでなくたってころがっている、名詞の羅列よりは景気がよい」とのこと話が進んだ。以下、知人の提言と小生の感想。

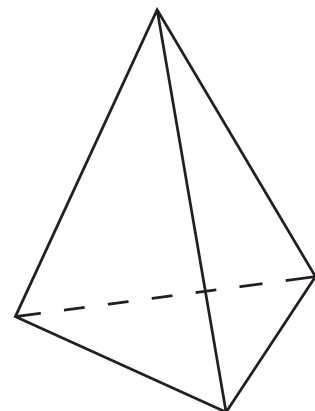
「来た、見た、勝った」賽を投げたカエサルを決め台詞。

「火の用心、お仙泣かすな、馬肥やせ」一筆申す。

「レディ、セット、ゴー」位置について、用意、ドン。

「走る、攻める、守る」イチローならまだしも、廃用性萎縮のすすむ私にはきつい。

「書いた、愛した、生きた」スタンダード。あやかりたいが凡の街医者には「ノム、ウツ、カウ」か「くう、ねる、遊ぶ」くらいか、ともらしたら、知人いわく、君の生きている間は無理、これは墓碑銘。



センター試験と小林秀雄

函館市医師会
函館渡辺病院

水関 清

今年もまた、大学入試センター試験の会場へ向かう子どもたちの姿を目にする季節がめぐってきた。

2013年に行われたセンター試験の国語で、前身の共通一次試験時代からの34年間の中で初めて、小林秀雄の文章が出題されたことが注目された。大問の筆頭に据えられたのは『鐔(つば)』で、設問は6題、配点は50点。印象的だったのは、その文章の長さもさることながら、語句を説明する21もの「注」と、刀の鐔を説明する1枚のイラストまで付けられていることであった。

出題された『鐔』という文章の大意は、以下のようなものである。鐔とは、刀と握りの間にあって、刀身と手を分かち部位となる。刀という攻撃的な存在の中にありながら、相手の刀を受け、かつ自身を刃から守る、という意味で、攻撃の中に取り入れられた防御ともいえるべき、きわめて個性的な存在でもある。応仁の乱を境に、特権階級の象徴であった太刀は実用的な兇器に変じ、鐔も実用本位の堅牢な鉄鐔になった。その乱世の中で人々は、仏教的な装飾を鐔に施して、平常心や秩序や文化を求め、少しずつ鐔の姿を変えていった。戦国の世が過ぎて刀が腰の飾りになると、鐔は金工の腕前を競う場と化して、鉄の地金に、鑿で文様を抜くなどの装飾が加えられるようになった。時代時代の人々の営みが、無機的存在としての鉄の地金の装飾に、色濃く反映されてきたのである。

特に難問であったのは、以下の文章(大意抜粋)を読んで答える、設問5であった。「先日、伊那の知人に誘われて高遠城址の桜を見る機会があった。そこへ向かう杖突峠への道すがら、青空に網の目のように拡がっている、芽吹いた大木の梢の上を、白い鳥の群れが舞っていた。よく見ると、枝のあちこちに壺ほどの大きさの鳥の巣が付いている。そのうち、一羽の鳥が頭上低くを舞った。両翼は強く張られて風を捕え、二本の脚は身体に沿って折れ、嘴は延びている。鶴丸透の発生に立会う想いがした。」「鶴丸透の発生に立会う想いがした。」のはなぜか、というのがその設問だが、冒頭にあった「鐔」の説明イラストのようなものは、この設問に関しては付けられていない。

正解は、「ひたむきに巣を守って舞う鳥に出会い、生きるために常に緊張し続けるその姿態が力感ある美を体現していることに感銘を受け、鶴の文様を抜いた鶴丸透の出現を重ね見る想いがしたから。」であったが、なまじ日本航空の「鶴丸」マークのことを知っている、つい「巣を守る鳥が警戒しながら

飛びまわる姿に触発された金工家達が、翼を広げた鶴の対称的な形象の文様を彫る鶴丸透の構想を得たことに思い及んだから。」を選んでしまいがちだが、小林秀雄の文章の中で鶴丸の対称性についての言及はないので、誤りである。

丸谷才一が、「くうまくて、歯切れがよくて、なんだか凄い!といふ感じがするけれども、何を言ってるのかわからない」と評した小林秀雄の文章には、共通一次試験が始まる前に大学入試を受けた世代にとっては、問題を解く以前に、その独特な言い回しの意味するところを理解しようとして、脂汗をかきながら難解な文章に取り組んだ記憶とともに、当時の苦闘の日々からにじみ出す、ある種の懐かしさが付きまとう。

小林秀雄の文章の特徴は、細部を詳細に描き出す文章が続くかと思えば、いきなり感情の発露としての短文が挿入される。前掲の「鶴丸透」がその好例だが、身近のありふれた事物から、ものごとの実存に迫り、一見論旨が飛躍したかに見える短文をテコにして、時間も歴史も人間の「思い」が作るのだという確固たる自らの認識へと、巾着の口を締めるように、一瞬にして文章の要諦を集約させるところにある。老境に差ししかかった今ならそうすんなりと思えるのだが、限られた試験時間の中でこの長文を読み、それに匹敵する長文ぞろいの設問への解答を求められる受験生の身の上を思うと、胸がつかえる思いがする。

最近とある実習の場で、この小林秀雄の試験問題を解いて入学を果たした学生の話聞く機会があった。さぞや苦勞したのだろうと身構えていると、明るい顔でこう答えてくれた。いわく、「パラフレーズに気をつけさえすれば、簡単」とのこと。あつげにとられた私に、次のような説明をしてくれた。

作問者は、問題文の意味内容を変えずに別の表現にすることで、選択肢を作る。これを、問題文のパラフレーズ化による出題という。それは、書き手の言わんとすることを咀嚼したり解釈した上で問題を作ると必ず異論が出るため、これを避けるためである。多肢選択式問題の解法は、問題文の語句がパラフレーズされて、うまくちりばめられている選択肢を選べばよく、出題文を正確に理解することではないとのこと。要は、うまく問題文のアラさがしをすれば足り、それで十分に解答できるそうである。さぞや苦吟しながら小林秀雄の文章に取り組んだのでは、との思い込みは見事に外されてしまった。

出題文の『鐔』に戻ろう。「誰も、乱世を進んで求めはしない。誰も、身に降りかかる乱世に、乱心を以て処する事は出来ない。人間は、どう在ろうとも、どんな処にでも、どんな形ででも、平常心を、秩序を、文化を捜さなければ生きて行けぬ。そういう止むに止まれぬ人心の動きが、兇器の一部分品を、少しずつ、少しずつ、鐔に仕立てて行くのである。」

小林秀雄の評論は、人生の奥義を語った、もうひとつの古典落語なのかもしれない。

余命のこと

札幌医科大学医師会

浦澤 正三

同年齢の集まりで、「自分は平均寿命の80.79歳を生きたので、もういつ死んでもいい」などという話を聞くと、極力「それは今年生まれた赤ん坊の平均の寿命で、80歳男性の残された余命は平均8.89年。まだまだ先がありますよ」などと訂正するようにしている。以下はこの約9年という自らに残された平均余命についてである。

学生時代に医学統計の基礎や人口論についての講義を受け、さらに卒業後直々に衛生学のご指導を頂いた恩師の金光正次先生は、定年退職後JICAの派遣専門家として70歳までインドネシア医学生物学研究所プロジェクトの顧問を務められた。学会出席のため上京し、帰国後の先生にお会いした折の話の中で、先生は「自分がいつ死ぬか分からないのが問題だ。子どもに遺産を遺すことなどは考えないが、いつ死ぬかが分からないと今後の人生設計が立てられないから」と言われた。私はその時、「余命は年齢別生存率（確率）に基づき計算された平均余命（特定年齢以上の延べ生存期間をその年齢人口で割った値）などでしか表すことができない。個人の寿命など分かる訳がない。学生に統計学や人口論を教えた先生らしくないことを言われるなあ」と思った。

しかし80歳になった今は、先生の言われたことはもっともと納得できる気がする。確かに平均余命は確率的な計算の結果であり、個人の生死など問題外である。しかし、余生の限られた一高齢者（当時の先生のお歳は71歳位だった）にとっては、その平均余命まで生きているか否かが問題なのであり、平均の生存年数などということは何の意味もない。すなわち「生存」か「死亡」かの二者択一（いわば二分法）なのであり、この私があと何年生きるかが最大の関心事なのである。

そんな訳で、私も最近は残る寿命についていろいろ考えることがある。「いつ死んでもいい。いつまで生きてもいい」という人がいる一方、何がしかの目的を達成するためにいついつまで生きたいと願う人もいる。基本的には私は前者の考えに近く、実際に本誌および札幌医会報に2～3そんな文章も書いたりして来たが、つい最近になって、自らの置かれた環境が変化したことにより、この考えが変わってきたことを自覚してやや驚いている。

事象の起こる確率に関する‘probability’（蓋然性と訳しておく）と‘possibility’（可能性としておく）という術語がある。前者は「蓋然性が高い」

などと主として出現の確率がある程度高い場合に、後者は「可能性がゼロではない」などと概して低い場合に用いられる。因みに「オートファジー」の発見で昨年のノーベル医学生理学賞を受賞された大隅良典氏は、「この頃の研究者は先の見えることばかりやるが、先の見えない難しいことが面白いのだ」と言っている。「人の行く裏に道あり花の山」の格言もある。予想外の結果を求める、あるいは少ない‘可能性’を追求することの重要性ということだろう。

新聞を読むことが日頃の日課であり楽しみでもあるが、「札幌市が2026年冬期オリンピックの開催都市に立候補する」「燃料電池車を2030年までに80万台に増やす」「北海道新幹線の札幌延伸が5年前倒しされ2030年度末になるかもしれない」などの新聞記事を興味深く読んでいて、愕然として我に帰り、「お前、そんなに長生きすると思っているのかよ」と自問することがある。

‘蓋然性’の点から、「到底〇〇歳までは持たないだろう」と消極的、悲観的になるのは、ある意味で合理的・理性的なことであり、加齢に基づく自然な感情である。一方、少ないながらも幾ばくかの可能性はあるのだ。‘可能性’を考え、積極的に「何歳まで生きるのだ」と自らに言い聞かせ、そのために自らなし得る限りの方策を考え実行するのは意志、意欲の問題である。80歳でエベレスト登頂に成功した冒険家・三浦雄一郎氏の主治医が、テレビで「これまでは体力が重要とずっと思っていたが、彼を見ていて体力より意欲がより重要と考えるようになった」と述べていたことが思い出される。

個人的にはいつ死んでも、いつまで生きてもいい、が基本であるが、上述のように、このところ周辺状況の変化もあって、この考えも少しく変わってきた。最近では、「平均余命を目途に何とか頑張ってみようか」といった心境で、そのためにも連れ合いの体調不良もあって、近頃疎かになっている毎日の散歩、運動、食事などの生活習慣をもう一度組み立て直してみよう、などと考えている。

認知症

札幌市医師会
札幌共立五輪橋病院

藤田 正樹

最近の高齢社会の加速化により、骨折で受診する患者さんの年齢もかなり高くなっている。以前31年間勤めていた病院での、大腿骨頸部骨折の手術患者の最高齢は103歳であった。中には認知症のため自分が骨折していることを認めず、ベッドを飛び越えて折れた脚で立とうとする人もいた。徘徊する老人でも、通常は骨折すると途端に大人しくなるのではあるが、人さまざまである。

ある時、骨折で認知症のある患者さんが急に夜間不穏になり騒ぎ出した。鎮静のためさまざまな薬物を使用しても効果がなく、同室の周りの人が眠れないので、やむなく周りの普段睡眠薬など飲んでいない人にも睡眠薬を飲ませざるを得なかったという、笑えぬ現実も存在する。

ある日、救急車で大腿骨頸部骨折の80歳代後半の女性が運ばれてきた。救急隊員が付いてきた家族に患者さんが認知症であることを聞いて、私にもそのことを伝えてくれた。その認知症がどの程度かを確かめるために、直接お婆さんに聞いてみた。「お婆さんお名前は何と言うのですか?」。すると彼女から驚くほどしっかりした答えが返ってきた。「名乗るほどの者ではありません」。一瞬、認知症であることを疑わせるような迷回答であった。次いで、もう既に亡くなっているご主人のことを尋ねてみた。「ご主人はおられるのですか?」。すると彼女は、「もうしばらく顔を見ていないので、入院しているかもしれませんね」と返答してきた。辻妻は合っている。

こんな患者さんが日ごとに増えている。われわれ医師も大変であるが、毎日認知症の患者さんの身の回りの世話をしなければならぬ看護師さんは、もっと大変なのである。

いずれ私も同じ認知症の道を歩むかもしれない。周りにいる看護師さんたちに「その時はよろしく」とお願いしているのだが、にこっと笑って「お任せください」と答えてくれる若い看護師に、不安を感じるのは私だけではないだろう。

町内会に参加して感じたこと

札幌市医師会
おちあい内科・消化器内科医院

落合 亨

内科の診療所を始めてから10年が経った。当院は住宅街の中であり、自分は診療所の2階に住んでいる。2年ほど前、自分が属する町内会の決まりで、地区の班長になってしまった（1年ごとの順番制になっている）。開業する前は転勤族だったので、会費を払うだけで町内会に参加した経験はなかった。1年間で町内会の活動から離れられると思っていたが、班長終了が近くなってきた頃、今度は班長経験者が役員になる決まりだという。そう簡単には抜かれられないようだ。

しかし、町内会に入ってみると、いろいろな活動をしていることを知った。住民の親睦を深める活動、防災対策、ゴミの収集や清掃、除排雪作業の取り決め、高齢者、独居者の見守り、子ども会やお祭りなど、地域の秩序を守り、安全で安心できる暮らしを支えていると思われた。

医療との関連でいえば、やはり高齢者の問題だろう。最近、独居の高齢者が増えているため、個別に定期的な訪問をしたり、緊急情報（かかりつけ病院名、家族との連絡先、服薬内容、利用している介護施設名などを記載している）を個々の家に置いたりしている。また、行事を通じてコミュニケーションを取るようにしている。

町内会については、現在の日本が抱える社会的な問題がそのまま反映されているようだ。核家族化、少子高齢化、極端な個人主義、集合住宅の増加などにより、参加する人が減り、解散しているところもあるようだ。しかし、これから確実に訪れる超高齢化社会となったとき、現行の制度のままであれば、住民の暮らしの安全性、利便性を維持していくためには、行政の関与だけでは不十分であろう。病院の入院病床が減り、在宅医療といっても支える家族はおらず、ロボットや人工知能が発達しても限界があるのではないかと。高齢者、独居者に対しては、近くの者が関与していくしかないのではないかと。この点、町内会組織は重要な役割を担っているようだ。自分も地域住民のために少しでも役に立つように頑張りたいと思っている。

学生街の喫茶店

小樽市医師会

鈴木 隆

北海道医報・第1180号「新春随想」に『喫茶・軽食 葦（あし）』のタイトルで、札幌医大前のビルの地下にあった「喫茶 葦」の思い出が語られていた。このとき、初めてこの店が昨年6月に閉店したことを知り、残念であるとともに、そこに通ったことのある医学生とその後の医師人生の幾星霜に想い至り、感慨が深かった。

この文で、開店は「1969年の数年前」と著者の明田克之氏は述べられている。私が大学に入学したのは1966年だったが、そのときはすでにその店はあって、学生の出入りが多かった。二人座りの椅子のスプリングや深紅のような布地が新しい訳でなかったから、開店からは時間が経っていたようだった。地下にあるから当然窓がないので落ち着いた雰囲気があって、そのような喫茶店はほかに狸小路7丁目の音楽喫茶があった。私は授業をさぼって時間をつぶすのはこの喫茶店と決めていて、コーヒーを味わって至福のひとつときを過ごすことができた。CarpentersやPP&Mなど、当時のヒット曲が客の注文で流れていた。壁に掲げられた幾枚かの絵画は私の同級生が描いたもので、彼はそれで生計を立ててお母さんに仕送りしていたという。絵画制作に忙しくて欠席が多く、出席しても下絵を描いていた。ある人はフロイトに心酔し精神科に進むと言って「精神分析入門」などを読んでいたが早起きができず、夕方この喫茶店でコーヒーを飲んで帰宅していた。やがて大学に来なくなった。この喫茶店の階上に雀荘があって、そこに通い詰めて大学に来なくなった者もいれば、一步手前で大学に戻った者もいた。学園闘争が始まると狭い小さな大学だから緊張感が漂い、それに嫌気が差したのか辞めていった者もいた。いろいろな人たちがそこを通り過ぎて行ったが、まだみんな粗忽で不器用だったような気がする。

私たちは大学を卒業すれば忙しくなり、地方勤務と大学勤務を繰り返し、最後まで大学に留まるのは教授と学長だけになる。だから「葦」という喫茶店からは足が遠のくようになった。ただ時折「学生街の喫茶店」という曲を耳にするとき、懐かしく思い出すくらいだった。

私が函館に固定するとき（大学の隣の旧札幌通信病院、現NTT東日本札幌病院から）、もう大学とは縁が切れて、あの限界に来ることはないだろうと思っていた。ところが10年後に道南の地域センター病院の院長になった。地域センター病院だから診療科

が多い、しかもすべて札幌医大から派遣してもらっている。おまけに移転建て替えの話が進んでいたから、医療機器の整備・診療科の拡充の相談を教授・医局長と進めていかなければならなかった。もう来ることはないと思っていたあの限界にまた戻ってきてしまった。教授との面会には道南から来るので、時間は十分な余裕を持たなければならない。それにはまずあの喫茶「葦」に入って時間を調整し、適当な頃を見計らって大学病院研究棟ロビーに入り、定刻に教授室に向かう。だから頭の中は教授との用件で埋められていて、喫茶「葦」はあまり眼中になかった。ただ、むかし椅子はソファードットなのが堅い木の椅子になったぐらいの程度しか気付かなかったと思う。冬のあるとき、風邪を引いて発熱し、食事が摂れなく脱水傾向になった。約束の時間は守らなければならない。随行した事務職員が、「葦」の斜め向かいのコンビニでインスタントスープを買ってきてくれた。そのコンビニはむかし中華料理「千日前」があったところだった。「葦」のママさんにお湯を入れてもらい、すすって一息つくことができた。

やがて勤務先が変わって北大と札幌医大に通うようになったが、同じようにそこを利用してきた。数年前に定年退職して時間に余裕ができてくると教授訪問がなくなったけれども、今度は喫茶「葦」が懐かしく感じられるようになり、行ってみたいくなった。それは晩秋の季節に限ると決めて、毎年その時期に訪れ、そして円山公園まで移り変わりゆく景色を眺めながら歩いた。自分の「学生街の喫茶店」は「葦」だった。

そんなあるとき、いつものようにコーヒーを飲み終え出てくるとき、カウンターの奥にマスターがいた。それは今も昔も変わらない風景だったが、レジを挟んで会計を済ます私の妻とママさんがいた。どこか合わないと思った。地下の階段を上りながら気になって考えた。あれから半世紀、なぜママさんは同じなのだろうか。同じと思ってきていたのが間違っていたようだ。学生時代のあるとき、数人でここに入り賑やかな私たちに、ママさんが笑顔でコップの水を出しながら、私にも皆さんと同じくらいの娘がいるのよ、と言っていた。そのときは東京の大学にでも行っているのだろう、くらいにしか思っただけだった。しかしいま考えてみると、その娘さんが今のママさんではないかと思う。妻は老けたが、私も老けた。ただママさんとマスターだけは世代交代して昔のイメージを保っていただけだったのだろう。今度そのことをママさんに確認しようと思っていたが、昨年の秋は行きそびれてしまっていた。

産婦人科医のつぶやき お雛様は子宮頸がんだった？

札幌市医師会
札幌がん検診センター

藤田 博正

ようやく長かった冬も峠を越え、春めいた季節が訪れようとしています。三月三日は女の子にとって最大の楽しい出来事かもしれません（本人以上に母親や祖父母、意外にも父親だったりして）。

ひな祭りは、無病息災を祈願する行事で、紙・土・草・藁などで簡単な人形を作り、病気や災いを身代わりに背負ってくれますようにと、お酒やお供物を添えて願いを込めて、川や海に流す上巳の節句が原型とされます。『源氏物語』須磨の巻の中に、「三月一日に出で来る巳の日、今日はかく思ふことある人は御禊し給ふべきと、なまさかしき人のきこゆれば、海面もゆかしくて、出で給ふ。いとおろそかにぜむじょうばかりを引きめぐらして、この国にかよひける陰陽師めして払へさせ給ふ。舟に、ことごとしき人形のせて流すを見給ふに」との記述あり、「流しびな」の風習は平安時代からあったようです。

「流しびな」の伝承は各地にあります。淡島信仰の影響が強いと思われます。淡島信仰の「流しびな」の主は、天照大神の六番目に生まれた姫宮で、十六歳のとき住吉明神へ嫁いだ后（天皇の配偶者や母・祖母等に与えられた地位、あるいは同等の高貴なお方）です。しかし、うるさい病（白血・長血などの下の病）にかかり、夫婦の契りができなくなります。病を治そうと身代わりの人形を海に流しましたがその効かなわず。その後、図綾の巻物と十二の神楽と供にうつろ船に乗せられ七度の浜（現堺市七道）から海に流されます。流れ着いた先が加太の淡島で、旧三月三日だったことから、姫宮（お雛様）は「女性を守る神になった」という伝承が元となっています。

うるさい病とはどのような病気かは明らかではありませんが、十六歳で結婚し、夫婦の契りができないほどの長血（だらだら続く出血）や白血（白血球の多い帯下あるいは膿汁）がある下の病、そしてうつろ船に乗せられ海に流された（死亡した?）。これらの病歴から先生方はいかかなる疾患を想像しますか？

日本神話の国生みでイザナギ、イザナミの第1子の水蛭子（ヒルコ）は不遇な子どもとして葦の船で流されます。その後、第2子に淡島を産む訳ですが、船に乗せられ海に流され、流れ着いたのが淡島であったなど共通性が感じられます。なお水蛭子と淡島はイザナギ、イザナミの子どもの内に数えないことになっています。

ところで子宮頸がんの原因はヒトパピローマウイルス（HPV：約150型中15型がhigh-risk型）感染ですが、ウイルスにとって感染の目的は人に癌を作ることではなく、ウイルス自身の増殖、繁殖であり、いかに自分の子孫を多く残すかにあります。だとすると、どの年代に感染すると最も効率よく目的を達せられるか考えてください（閉経を迎えた熟女ですか？ 10～20代のピチピチギャルですか？ もしあなたがHPVだとしたら）。

一方、HPVが感染しただけでは癌になりません。HPV-DNAの一部がヒトのDNAの中に組み込まれることにより癌が発生します。この点、B型肝炎ウイルスDNAの「組み込み」による直接性発癌タイプと言われる若年性・非肝炎性肝がんが、子宮頸がんによく似た発癌様式をとるものと思われまます。どちらも宿主に「組み込み」が起きると早期に癌が発症します（「組み込み」を起こすウイルスの本来の宿主は人以外かも?）。

「組み込み」はいつどのような細胞で起きるのかとなります。いくら強力な発癌性HPVであっても、増殖休止期の静止細胞では「組み込み」は無理です。DNA複製期あるいは細胞分裂期の細胞が最もスキがあり、「組み込み」はこの時に起きると言われています。細胞が盛んに増殖分裂している年代はやはり10～20代ということになります。残念ながらわが国には正確ながん登録はありませんが、ゆりかごから墓場までと言われ、正確にデータを取っている英国では上皮内癌のみならず進行癌の罹患数、罹患率はともに20代がピークとなっています。

さて、お雛様のご存命であった時代、平均寿命は30歳そこそこで（40歳を超えるのは江戸時代になってから）、女性にとって20歳までに数人～それ以上の子どもを出産しておかなければなりません。したがって、この時代の女性（少女）は初経が来て数年後（まだ思春期）には妊娠、出産することになります。だとすると、思春期の時期にHPVの感染した少女は20代で進行癌を発症していたとしても何ら不思議なことではありません。神様（お雛様）も子宮頸がんを苛まれていたのかと思うと、産婦人科医としては感慨深いものがあります。

十六歳の少女にHPVを感染させた住吉明神様は相当悪質な「毒キノコ」の持ち主だったのか？（決して神を冒瀆するつもりは毛頭ありません）男性におけるHPV保有率に関しての論文数は少ないのですが数編あり、20～30代健康男性の30～46%からhigh risk HPVが検出されるとされます。そうしてみると、だれもがHPV感染を受ける危険性はあるのです。現代のお雛様（20歳～）には、HPVワクチン接種がうまくいっていない現状を踏まえ、ぜひ子宮頸がん検診をお勧めします。

マラソンを一度諦めて

札幌市医師会
北海道がんセンター

高橋 康雄

1996年10月より現在の病院に勤務し、早いもので20年が過ぎてしまいました。当初80kgを超えていた体重は、明らかに大学での運動不足が原因でしたので、これを機にと通勤の約4.5kmを歩くことにしました。最初は疲れましたが、景色を見ながら歩くのは心地よく、徐々に体も慣れ、体重も減ってきました。

そんな時、50歳を過ぎてからウォーキングを始め、フルマラソン、さらには100kmのウルトラマラソンまでも完走しているという60歳近い病院の同僚と出会いました。マラソンランナーは、走るのが嫌いだった自分にとって特殊な人と思っていただけに、とても衝撃的でした。40歳を過ぎた自分にもできるのではと思い、1998年から軽いジョギングをはじめ、ゆっくりでも1時間走り続けることができるようになった頃には、走ることが楽しいと思っている自分に驚きました。

そして1年後、無謀にも思えましたが、1999年5月に初のフルマラソンとなる洞爺湖マラソンに挑戦しました。確かに30km過ぎてからの辛さはありませんでしたが、何とか歩かずにゴールした時の感激は今でも忘れられません。更に、4時間を突破できたため、最終目標としていた北海道マラソンにも出場し、市民ランナーとしての人生が始まりました。

その後、フルマラソンは年に3～4回、道外も土曜日出かけて日曜日にマラソンして、そのまま帰ってきて月曜の外来に出るといったことを繰り返し、サロマ湖100kmウルトラマラソンも4回完走しました。マラソンなんて、辛いのにどうして？とか、何が楽しくて？とよく質問されましたが、走っている時の高揚感、沿道の声援や完走した時の達成感を経験した者にしか分からない喜びで、何とも口では説明できません。2008年には抽選で第2回目の東京マラソンにも当たりました。

その後、多少の関節痛などあるも、2011年8月の北海道マラソンまでは順調で、同年10月の第1回大阪マラソンも当たり、出場予定でした。大会直前になって股関節の痛みが出ましたが、一時的と思い、学会もあったため大阪まで行きました。しかしゼッケンをもらいに行くまでの道のりも痛みでゆっくりしか歩けない状態で、さすがに断念しました。札幌に帰り、整形外科を受診し、股関節周囲炎と診断され、リハビリを勧められました。それでも数回通い、症状も取れたためそのままにしていました。ただ、

ゆっくりでも1～2時間走ると痛みも出るようになり、ランニングからも遠ざかり、2013年の北海道マラソンもエントリーだけで出られませんでした。

何とかもう一度フルマラソンを、と思う気持ちとは裏腹に、ランニングに対するモチベーションも上がらず、ランニングの回数はどんどん減っていきました。痛みは休めば良くなると思っていましたが、改善どころか股関節に加え膝も痛むようになり、2015年には同期から変形性股関節症との診断受けました。リハビリの必要性は言われましたが、年だから仕方ないとも言われ変に納得し、結局その時もありリハビリを継続しませんでした。

この時点で、マラソンはもうほとんど諦めました。その後は、ランニングは全く行わなくなり、体重も75kg前後まで増えましたが、痛みは一時的で、日常生活には大きな支障はありませんでした。

2016年9月にはニュージーランド旅行でトレッキングも行いましたが、ほぼ問題ありませんでした。しかし、10月に入ってから、体動時の股関節の痛みに加え、夜間痛みで目を覚ますようになり、仰臥位で寝られなくなりました。

マラソンは完全に諦め、手術を覚悟して以前にも行ったことのある病院を受診し、MRIにて両側の変形性股関節症に加え、両側の変形性膝関節症との診断を受けました。幸いまだ手術の必要はなく、リハビリで様子を見ることとなったため、ひとまずは安心しました。元々ストレッチなども嫌いなため、これまではすぐに止めてしまいましたが、さすがに今回は週一回のペースでリハビリを継続しています。何回か通い、家でもまじめにストレッチ等を行ったところ、安静時には痛みも無くなり、仰臥位でも寝られるようになりました。現在約3ヵ月経過し、普通に歩く分にはほぼ問題なくなり、リハビリの重要性を改めて認識するとともに、これまできちんとリハビリを行っていれば大変後悔しています。

昨年には還暦も迎え、これからリハビリで更に改善するかどうかは、全く分かりません。それでもフルマラソンのハードルは高いと思いますが、実現可能な目標として、ゆっくりならハーフを走れるのではと思えるようになりました。

今後は一度諦めたマラソンを再度目指して、まずは5月の連休に屋久島の縄文杉トレッキングの完遂を目標に設定し、現在リハビリに日々励んでいるところです。

故郷への感謝を込めて

帯広市医師会
北海道社会事業協会帯広病院

堀 哲也

私は生まれも育ちも帯広市で、初期臨床研修の2年間も帯広市内の病院で過ごしました。その後は道内を転々としていましたが、昨年4月に総合診療科を新しく立ち上げるために、再び帯広へ戻ってきました。生まれ育った故郷の良さを再発見するとともに、外来診療などでの予期せぬ旧友や知人との再会に驚かされる毎日です。また、中学校や高校の同級生や先輩が看護師や放射線技師として数名勤務しており、比較的早く職場環境に馴染むことができました。

月日の流れは早いもので、昨年4月に総合診療科を新しく立ち上げてから早くも1年が経とうとしています。診療だけではなく、初期研修医や専攻医（後期研修医）の指導も担当し、本当にあっという間の1年でした。お陰様で、少しずつではありますが、外来、入院ともに患者さんが増えて、さまざまなことに悪戦苦闘しながらも楽しく元気に働いています。この1年を振り返ると、総合診療科のメンバー、当院の職員のみならず、十勝・帯広地域のたくさんの方々を支えられて過ごした1年だったと思います。大学の同期や先輩後輩、今までお世話になった病院や診療所の先生方からも多くの励ましの言葉をかけていただき、診療や会議などで忙しい毎日ですが、体調を崩すことなく働くことができます。この場をお借りして、サポートしていただいた多くの皆様に心から感謝申し上げます。

地元の病院に帰ってきて改めて感じたことは、出会いの大切さだと思っています。日々の業務に追われる毎日ですが、ご支援やご指導していただけるたくさんの諸先輩方との出会いがあって、今の総合診療科があると感じています。そして、新しい環境にもかかわらず研修に来てくれた専攻医の後輩たちには、多くの場面で支えられました。新年度からは、専攻医の入れ代わりなどもあり、また新しいチャレンジが始まりますが、これからも感謝の気持ちを忘れずに、少しずつでも恩返しができるように精進していきたいと思っています。また、診療だけではなく、地元で貢献できるような地域・コミュニティケア活動も拡充させていきたいと思っています。

日本航空宇宙学会のこと

札幌市医師会
豊和会札幌病院

水谷 哲夫

外科医院を開業して間もない1987年に、日本航空宇宙学会が札幌で開催されたのを機に入会した。地球史に興味があったが、そのときの宇宙開発状況も知りたかったからである。数千人もの航空宇宙関連従事者の正会員に比べ、部外者の個人賛助会員は当時5名だった。時代は米ソの宇宙開発競争が技術の飛躍的な進歩を遂げ、アポロ計画による月面着陸や惑星探査衛星の打ち上げ、スペースシャトルの活躍によるハッブル宇宙望遠鏡の設置などがあった。日本でも既に気象観測衛星ひまわり1号機がNロケットにより静止軌道に打ち上げられるなど、今度はロケットの開発や国際宇宙ステーション（ISS）建設の話が実現されようとしていた。そのときの宇宙科学技術連合講演会講演集には各種衛星の構造、材料、技術、軌道計画などに加えて、次世代のH-IIロケットに関する試験、解析が多く見られる。シンポジウムはH-IIロケットによる宇宙観測衛星の開発および宇宙関係地上支援施設が主題であった。その後、毎月送付される学会誌の中から面白そうな部分を拾い読みしていた。

そして30年後の現在、H-IIA、H-IIBロケット打ち上げ成功率は97%を超えて世界のトップレベルとなり、ISSへの物資補給機「こうのとり」6号機も2016年12月に打ち上げを成功させた。ISSへは米国のスペースシャトル（現在は終了）とロシアのソユーズ宇宙船により、日本人を含む多くの国籍の宇宙飛行士が搭乗、帰還を繰り返し、かつて実験試行されたイオンエンジンも現在は実用化されている。今後はより廉価なロケットの運用、開発が行われつつある。

人類の英知（欲望？）を大いに感ずる。近年中国も独自の宇宙ステーションを打ち上げている。一方、誰のものとも思っていなかった月の土地が売られているとの話も聞くし、月面の資源開発構想もあるようだ。今後、地球・宇宙開発の進路はどのようになっていくのか。競争に明け暮れた人類であるが、一方では知性を持ち、慈愛、希望、誠実さなども兼ね備えているのだから、水の惑星・地球全体のため、更に英知を重ねた方向性を期待する。